馬を用いた取り組みにおいてより良い馬との関係を作るために

川　嶋　　舟
（東京大学大学院農学生命科学研究科
獣医学専攻博士課程・獣医師）

はじめに

私たち人間が動物と付き合い良い関係を持つことによって私たちの生活やその質の向上に良い影響がもたらされていることは、今までに動物と付きあったことのある人であれば想像する事は難しくはない。ペットとして犬や猫を飼っている人たちにとり、犬や猫が生活をともにしてくれていることで私たちの生活が豊かになり充実したものになっていることは紛れもない事実である。

馬においても同じような効果があるのではないだろうか。しかし、現在の日本における馬の存在は、犬や猫のように決して身近な存在ではないことを考えると、初めて馬に接する人と馬とが良い関係を持てるようになるには、馬との付きあいをはじめる際に馬との良好な関係を築けるように配慮する必要があるだろう。

筆者は馬を対象とする獣医学の立場から障害のある子どもに対する馬の活用について関心をもち、国立特殊教育総合研究所肢体不自由教育研究部の行う本研究に関与してきた。

本稿では、馬をhorse therapyをはじめ様々な取り組みに利用する際に、馬との付きあいをはじめる人が、馬とのより良い関係を築くために配慮すべきと思われることについて本研究にかかわって実施された実践を通して考察した内容の幾つかについて述べる。

１．馬を理解し、馬との関係を深める

今日の日本において、馬との付き合い方や馬に対する認識や理解の程度は、人によって大きく異なる。馬という動物を全く見たこともない人・競馬中継をテレビで見たことがあるだけの人・観光牧場での乗馬体験がある人・乗馬クラブ等に通っている人など多種多様である。その中で、多くの日本人にとって「馬」というものを想像するときには、ほとんどの場合「競走馬」であることを忘れてはならない。また、現在の日本では、馬というものを実際に見たり触ったりしたことのある人は決して多くないのが現実で、大部分の人にとって馬という動物が身近な存在ではないことをしっかりと理解した上で、馬と付きあうことを考える事が大切になってくる。

馬を用いた取り組みをする際には、馬からさまざまな働きかけを受ける人が、馬と良い関係を築き、馬を理解し、馬が好きになる事が大切である。初めて生きている馬と付きあいはじめる人にとって、馬の大きさは、たとえポニーであってもとても大きく感じるであろうし、「いななき」などのちょっとした馬の動作もその大きさと存在を改めて実感させ、怖さや恐れなどを抱かせるきっかけとなりうるだろう。一般に、馬と付きあったことのある人の多くは、馬を好きになることは簡単である思う傾向にあるが、はじめて付き合いをはじめる人にとっては必ずしもそうではない。馬を理解し安心して受け入れるようになるまでにはある程度時間を要するものであり、その段階をしっかりと経験する事がとても大切な事なのではないだろうか。馬をすぐに受け入れる事ができる人もいれば、様々な葛藤がありなかなか受け入れられない人もいる。周りの人は、その気持ちを十二分に汲んで対応する必要があり、決して無理強いをすべきではない。彼あるいは彼女にとって、自分の意思で馬との付き合いを納得しながら経験していくことが、これから馬と時間を共有していく際にとても大切なことになるだろう。

２．取り組みの日までに

取り組みの日の馬との関わりあいは、取り組みを行う前から始まっている。「今度のお休みにお馬さんに乗りに行こうね」とか「馬に会いに行こうね」などというきっかけづくりを御両親がしている事が多い。参加者も、あと何日で馬と会うことができるのだということを理解し、各々「馬」というものに対するイメージや気持ちを育み、取り組み当日の朝を迎えている。馬を目の前にする当日、参加者の持っている馬に対する様々な気持ちを解きほぐし、本人が納得した上で、馬との付きあいが始められるように、取り組みを行う関係者は心がける必要がある。

この取り組みに参加する参加者の多くが、年に１，２回の活動であることや初めての参加者の方であることから、取り組みの当日に必ずしも全員が馬を受け入れられる状態であるとは限らない。馬との関わりあい方がどのような段階にある参加者であっても、毎回安心してその人なりの馬との関わりあい方ができるようにする事が大切となる。いかにして参加者と馬との良い関係を作ることができるかが、その日行える取り組みの内容を決めてしまうことになる。

また、これから馬との付きあいをはじめる人の両親や兄弟をはじめとする関係者の方が馬に恐怖心を持っていると、不安な気持ちは確実に参加者に伝わり、参加者は素直に馬の魅力を感じることが出来る。したがって、もし両親等が馬に怖さを感じているのであれば、まずその抵抗感や恐怖心を取り除き、馬に親しみを持ってもらい、馬を好きになってもらう事が大切である。

３．取り組みを行う場所の環境

参加者にとって馬に関わる取り組みを行う活動の場所は、普段多くの時間をすごしている場所とは、異なった環境であることを留意すべきである。スタッフにとっては当たり前の場所であっても、取り組みの参加者にとっては、なじみのない場所であることが多く、たとえ普段慣れ親しんでいる場所での取り組みであったとしても、全く知らない馬とそれに関係するスタッフはじめ多数の見知らぬ人がいることによって、異質の場所になる。私たちが、新しい環境に遭遇した時には、好奇心に刺激をされて興奮するとともに、未知の世界に対する恐れといった恐怖心も同時に心に持つことを想像できるだろう。また、未知の場所に警戒する気持ちが、馬に対して警戒する気持ちに置き換わらないように心がける必要がある。さらに、未知の場所をなるべく警戒させないような配慮をすることも大切である。

多くの参加者にとって、生きている馬たちを間近に見るのは、馬との取り組みを行う場所が初めてであろう。その人なりの馬に対する様々な気持ちを持って取り組みを行う会場に来た参加者をどのようさりげなく迎え入れることが出来るかが大切なことである。そのために、取り組みを行う場所の雰囲気作りがとても大切となる。

参加者と馬との付きあいは、取り組みの日、馬のいる場所に着いた時から始まっている。参加者が会場に来たときに近づきやすく和やかな雰囲気であれば、参加者も緊張することなく、会場の中に自分の居場所を持つ事ができる。取り組みに関わるスタッフや見学者が、近づきにくい雰囲気を作ってしまうと、それだけで、様々な気持ちを持ってこの場所にきた参加者には、余計な不安要素を与え、馬に対する興味を失わせるきっかけとなりうるものである。会場に参加者が居場所を見つけやすいように心がけるとともに、参加者自身が他の多くの人に見られていることを意識させないように会場をつくることも必要となる。

４．馬との関係を自分のペースで深める

この取り組みの参加者の多くは、馬に関わることははじめてであることが多く、実際に馬を見た時に、「とても大きい」とか「怖い」などの反応をすることが多い。

人は誰でも、新しく触れる動物に対して、最初は遠くから見つめ、だんだんと近づき、触ってみるという行動をとるものである。相手がどんなに調教しておとなしくしていても、はじめて接する動物に対する気持ちと行動は誰もが同じであろう。馬に対する恐れをまだ持っている時に無理に触らされたり乗せられたりしたら、どのような気持ちになるだろうか。結果的には笑顔をみせたとしても、少なからず心にわだかまりが残るものだろう。そんなわだかまりを持つことのないように参加者が馬との良い関係をつくることが、理想的な結果をもたらすことになるであろう。

どんなにスタッフが馬に乗ることが楽しいことであることを知っているからといって、参加者が馬を受け入れてなくても馬に乗ってしまえばその楽しさがわかるはずだ、そして馬が好きになるだろうという気持ちで参加者に無理を強いることは避けるべきである。

つまり、本来時間をかけて行い自分自身で納得しながら次の段階に進んだ経験と、外部からの働きかけによって途中の段階を飛ばしてしまった経験とでは、最終的に同じような結果を得られても、その後の成果には違いが出てくるものだ。

これから馬との関係を持とうとする参加者に対しては、その段階を一つ一つ経験することが大切なことであり、馬を受け入れる段階を一つ一つ丁寧に積み重ねることによって、馬を心から信頼し、馬とのコミュニケーションをするきっかけを見つけるのではないだろうか。

５．馬との関わりあい方

参加者は、馬のしぐさや私たちがどのように言葉をかけて馬を扱っているか、周りの仲間がどのようにすごしているかなど、実によく自分の周りで起こっている物事を見ている。参加者の気持ちがいろいろなところに向いている中で、馬に興味を持ったときに上手に馬の気持ちを彼らに向け、対話ができるようにすることが大切である。

馬と関わりあう事は、馬に乗ることだけが目的ではなく、馬を見ることや接することだけでも十分な場合もある。馬に乗ることの楽しさや面白さを知っていると思わず積極的にその楽しさを経験させたくなるものだが、必ずしもそれが良いことではない。馬に乗ることを怖がって泣いている参加者を無理やり乗せてしまい、馬から下りる時に笑っているからいいというものでもない。自分の意思で馬に乗りたいと思う事、そして馬に乗ろうとするところまでに至る道のりが必要でありその気持ちを尊重するべきである。

馬が好きな人達も、今までに一度くらいは馬などの大きな動物の存在感の大きさに恐れを感じた経験があるのではないだろうか。その時の気持ちを思い出し、決して、無理強いをして馬との関係をつくらせようとすることは避けな

くてはならない。怖がっている参加者を無理やりに馬に乗せて、結果的に馬に乗る楽しさを覚えたとしても、「馬に乗ること」を強制されたという事実が、後ほどどのような影響として出てくるのかも慎重に考えるべきである。

また、参加者本人以外の周りの人が馬を信頼して心を通わせていないと、はじめて馬を見る参加者や改めて馬との関係を作ろうとしている人は、安心して馬とのコミュニケーションを図ることができない。参加者に馬とのいい関係を築いてもらいたいのであれば、最初に、そこに関わる人たちが馬と良い関係になる必要がある。

馬の周りにいる人が、馬といるのが当たり前の雰囲気を作り出すことによって、はじめて参加者にとって、馬と良い関係を比較的短い時間で作り出すことが可能になる。大切なことは、決して強制することなく本人の意思や気持ちを尊重しながら馬に対する好奇心を最大限に引き出していくことである。

６．周りの人の関わりあい方

馬に関わることによる最終的な目標は、「乗ること」や「世話をすること」など様々な内容を対象者に応じ設定することができる。また、それらの事柄を行うことが、本人にとって「楽しいこと」あるいは「嬉しいこと」などの理由で、自発的にかつ積極的に取り組めるようになることが望ましい。その際に、その最初の段階において、馬との関わりあい方を大切にした経験を積み重ねていく事が、途中で馬を拒否することなく最終の目標に達することために必要となる。決して、強制されることなく馬に慣れ親しみ、本人が納得した上で、個々の馬との関わりあえるようにしていかなくてはならない。そして、馬との関係を徐々に作っていく間に、馬にとって気持ちの良いこと悪いことや馬と付き合う時に必要な約束事などを少しずつ過不足なく示唆し、本人に理解してもらうことが必要となる。その中で、参加者は馬を目の前にし、当日までに考えてきた馬と現実の馬との共通する点や異なる点を一つ一つ実感し納得しながら、馬というものを理解し受け入れるものである。その時には、馬が好きになるように積極的に働きかけるのではなく、本人が何をしたいのかを感じ取りその気持ちを尊重できるスタッフ側の心遣いが必要となる。

このことは、保護者の方についても同様である。保護者の方の多くは、馬というものを実際に触れたことはなくても、テレビの映像や写真集、新聞などで見たことはある人が多い。どんなに馬というもの頭で理解していようとも実際に馬を目の当たりにすると、恐怖心や遠慮が出てきてしまう人もいる。保護者の方が、少しでもそのような気持ちを持っていると、それは、参加者に伝わり、参加者も馬に対して、同じように「怖い」などのネガティブなイメージを無意識のうちに持ってしまうことが多い。これは、馬に関わらず、他の動物との付き合いでも同じような例があることからも分かる。参加者を安心させるためには、御両親をはじめ周りの関係者の方に馬を好きになってもらう事が必要である。

参加者は参加者なりの馬との付き合い方を見つけ出していくようになる。それが、馬に乗ることであったり、馬の手入れをすることであったり、引き馬をすることであったり、何でも良いのではないだろうか。彼らが、馬の存在を受け入れ、納得した付き合い方ができれば、その日一日の生活に満足し、それからの生活に深く関わるようになる。そして、次の機会により密接な馬との関わりを持ち、馬を前より受け入れられるようになり、前回できなかったことが出来るようになっていくのである。大切なのは、決して強制することなく、本人の気持ちを最大限に尊重しながら馬と付き合う環境を作ること、そして、スタッフがどの段階の人であっても、適切に馬との係わりあいを持つ事ができるように対応することである。

最終的には、馬に関わる人ともコミュニケーションをとる事ができれば良いが、最初は、その人なりに馬と付きあうことが目標となるであろう。得てして、このような取り組みを行う時には、馬よりも馬の周りにいる人の存在が目立ってしまうことが多く、これは良いことではない。これらの取り組みでは、参加者と馬が主役であって、あくまでスタッフは脇役もしくは黒子に徹しなくてはならない。それは、参加者が会場にきたときから始まっている。会場に来たときに馬よりも先に多くの人の存在が眼に入ったらどうだろうか。その人たちの目が自分に注いだらどうだろうか。喜ぶ人もいるかもしれないが、不快感や不安を感じるの方が多いだろう。いかに私たちが、さりげなく彼ら参加者が入りやすい雰囲気や環境を作れるかが大切である。

馬を用いた取り組みを行う際、参加者が会場にやってきたら優しく挨拶をしてむかえいれることが大切である。参加者本人は普段と違うことをするので、少なからず緊張していることが多い。その緊張を感じさせないためにも、挨拶をして迎え入れることが大切である。取り組みに関わる関係者が多いと会場の雰囲気が悪くなり、後からやってきて会場に入ろうとする参加者にとって、非常に抵抗感を感じさせるようになってしまうことがある。会場に入る前から緊張したり嫌になったりしてしまっては、その日の取り組みが無意味になってしまう可能性もあるため、そうならないように配慮することが大切である。また、はじめて会ったときに挨拶をして気持ちをかけることも大切である。これを行うことによって、参加者が会場に入りやすくなり、より良い取り組みが行えるようになるのである。

関係者は、決して自己主張することなく、しかし、必要なときには必要なだけのサポートをすることが要求される。

場合によっては、参加者と馬との関係を上手に取り持ち、なんら積極的に働きかけることなくただ見守ることのできる暖かい気持ちと行動が必要になる。また、参加者が馬とのコミュニケーションをとる際には、傍観者であってはいけないが、積極的にしかし目立ちすぎることなくその場に関わる必要がある。

７．無理することなく馬を受け入れる

馬と接する事が初めて人に対して、馬と仲良くなってもらう時には、その取り組みの関係者の多くは馬に乗ったときの楽しさを知っているためからか、得てして、本人と馬との関係が十分に出来ていなくても、無理に馬に乗せてしまう傾向がある。これは、馬に乗ったときに乗れたことを結果的に喜んで楽しんだとしても、馬という大きな動物に対する恐怖心を十分に解消していないため、突然馬や動物に対して拒否反応を示すことになる可能性を作ってしまっているのではないだろうか。

馬を直接見たり触ったりするのがはじめての人にとっては、馬を見ること、近づくこと、触ること、そして、親しみや怖さを感じることなど全てがとても新鮮で有意義な経験なのである。その中で一つ一つ感じたことを自分の心の中で十分に納得した上ではじめて、馬との良い関係をつくることが出来るようになるのではないだろうか。そのプロセスを省くことは、将来、馬を突然受け入れられなくなるなど何らかの不幸な結果が突然出てくる可能性がある。このプロセスを大切にすべき事を、馬を用いた取り組みの場面に関わる人は肝に銘じる必要がある。

「泣いていたけれど馬に乗れて今は喜んでいるからいい」という結果だけがよければ問題がないということはない。馬に乗るまでの段階で、「泣く」「すくむ」など、すなわち、怖い思いをしていて、そのことに対する気持ちが整理は出来ていないままに、乗ることだけの楽しさだけを経験するだけで、馬を心から受け入れられるようになるわけではない。無理して馬に近づいたという経験は、これから関わりあいを続ける際に、馬から学べるはずのものが学べなくなってしまうことにつながる可能性を否定しきれない。これは、参加者にとっても馬や取り組みの関係者にとっても不幸なことである。そのようにならないように、関係者は注意深く配慮して行っていく事が必要である。

８．二つの事例から

馬を用いた取り組みを行う際に考える必要のある事柄についていくつか紹介してきたが、最後に、私がこれらの取り組みに関わる際に思い出される事例を二つ紹介する。

（１）馬を受け入れるまでの経過

Ａさんは、馬の取り組みを行う前から、馬だけでなく動物に恐怖心を持っていて動物のそばになかなか近づくことが出来なかった。馬を用いた取り組みを行う場所にやってきたＡさんは、やはり、なかなか馬のそばに近づくことが出来なかった。

時間が経つにつれて一緒にきた仲間が馬のそばで触ったり遊んだりしているのを見て、徐々に馬のいる場所に近づいてはきたものの、常に馬からある一定の距離を保っていた。仲間が抵抗感を持つことなく馬と接している雰囲気の中、彼は自分なりに納得しながら馬と近づくタイミングを計っていたようだ。自分の意思で徐々に馬に近づこうとするのだがやはり馬が怖くて後戻りしてしまう。しかし、すぐに馬が視野に入る場所に移動して、常に馬の様子を観察していた。しばらく馬の様子を見ていた後、馬のいない馬房の中に入ってボロを興味深く観察しているのが印象的であった。その後、馬房のそばにある丸馬場に繋いである馬のところに、私の呼びかけに応じ、自分の意思で馬の前にやってきた。しかし、馬に興味がでてきているものの、馬のいななきや尻尾を振るなどの動作に怖さを感じ、馬のそばによって触ることが出来なかった。その間も、近くの場所で行われている他の人が馬に乗っている取り組みの様子や馬の世話の様子などをじっと観察していた。しばらくの間、馬に触ることは出来なかったが、馬の様子を柵の間から観察している時に、馬の引き綱を柵越しに渡すと、馬の引き綱を私と一緒であることを確認して手綱を手にとった。最初は、その場で引き綱を握り締めているだけであったが、こちらから「お馬さんと一緒に散歩してみない？」と呼びかけると、馬場の中に入ることは希望しなかったので、馬場の外から引き綱をもって馬と歩くことをはじめた。Ａさんにとっては、そのことがとても馬を身近に感じさせたようで、それ以降、柵越しではあるがエサをやったり触ったりした。そのうちに、馬場の外からではあるが、Ａさんが一人で馬の手綱を持つことを意思表示し、一人で引き馬をする事ができるようになった。その後しばらく馬との関わりあいを続けた後、丸馬馬の中に入って馬の世話をできるようになり、最後には、実際に馬に乗ることもできた。取り組みが終わった後には、馬に対して心を許すようになっていたのが印象的であった。

その間、Ａさんの両親は、無理にＡさんを馬に近づけ触らせたり乗らせようとしたりする事がなく、また、馬に対して恐怖心を持っていなかったので、Ａさんの前で自然な雰囲気をもって当たり前のように馬と接していた。

本人にとって、周りから強制されることなく自分のペースで馬と付き合う事ができ馬との関係を作ることのできた事が、結果的に、馬に対する怖さが少なくなり馬が好きになって、不安な気持ちを持つことなく心から馬に乗ること

を楽しめたという結果につながったのだと思う。その後の取り組みでも、馬との取り組みをおこなう場所に来てからすぐに馬に触ったり乗ったりする事に抵抗を感じているようで、最初は馬をじっくりと観察して、本人の気持ちの整理がついてからでないと、自分から馬に近づいて触ろうとしないことも、毎回馬に対する気持ちの整理をする機会を作ることの大切さを考える事ときに、いつも思い出される事例である。

（2）取り組みの際に使う言葉遣いについて

聴覚に障害ある B さんは、動物が好きで、馬に乗った経験もあった。しかしその後は、馬に乗ることを好まず、馬に興味を持つ事がなかった。ある時に本人が、「馬に乗るの時に自分の意思を馬に伝えるために馬のお腹を『蹴る』事が必要だと教わった。とても大好きな馬に乗るのに私は『蹴る』なんていう行為はできない。だから、馬には乗りたくない」と話してくれた。普段、馬と付き合う時に「蹴る」「たたく」などの言葉と行為を何気なく使っている事が多く、馬の取り組みを行う際も同様である。しかし、このように言葉に違和感を持つ人がいることも事実であると思う。このような事をスタッフは意識する事は少ないが、馬を用いた取り組みを行う際にこれらの言葉遣いや表現方法にも配慮できるようにする事が大切なことなのだということを強く考えさせられている。

おわりに

馬を用いた取り組みを継続して行うことは、馬との関わりあいをはじめる人に、自分なりに試行錯誤しながら納得し自分のペースをもって馬を好きになり、馬との信頼関係を築いていく機会を提示することであり、また、馬をきっかけとして様々な事柄を経験することで結果的にその人の生活の幅を大いに広げるものになるのであろう。日本で馬を用いた取り組みが幅広く継続的に行われるようになり、馬が今まで以上に身近な動物になるとともに、様々な種類に馬たちがその活躍の場を持てるようになる日が近いうちに来ることを願っている。